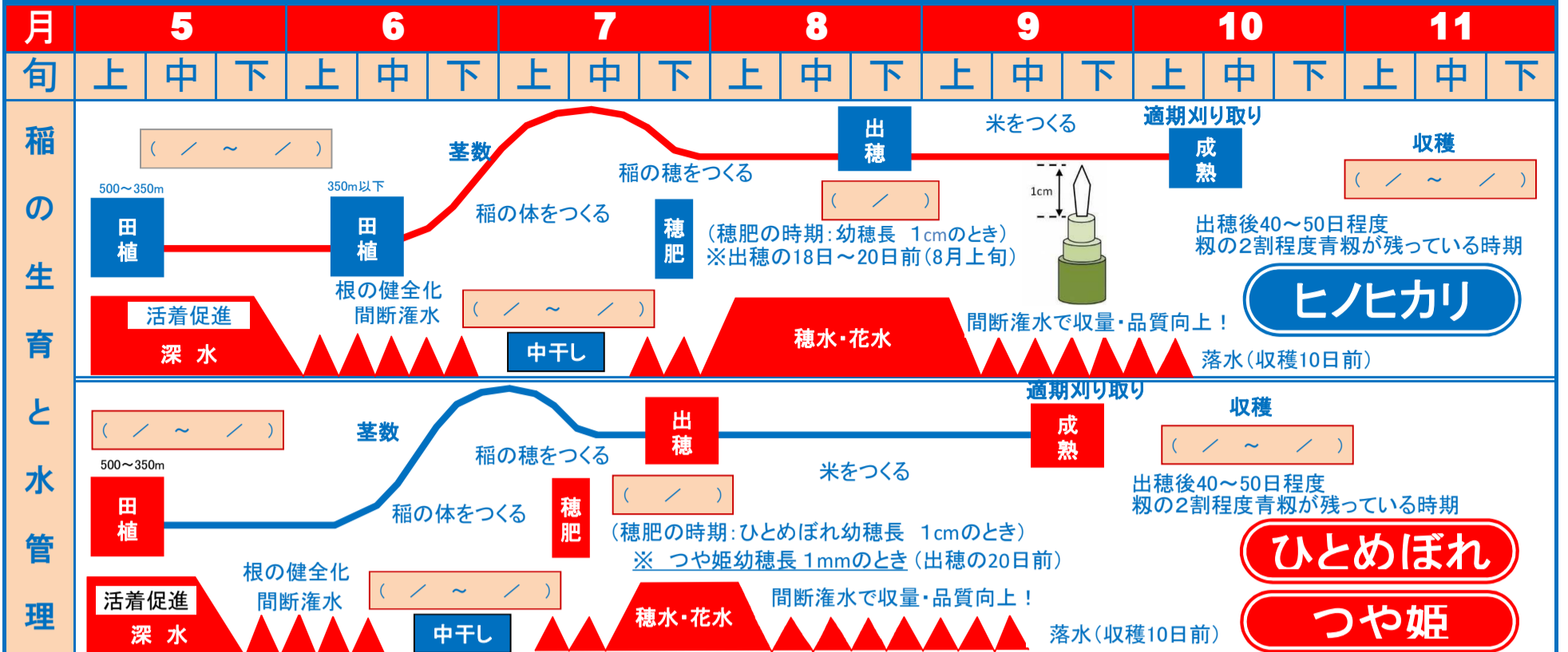


2021年度 竹田市水稲栽培ごよみ



獣害対策: 鹿・猪・鹿
 鹿ネット設置・苗の食害防止
 電気柵の設置 猪等の侵入防止
 柵の点検・柵周辺の草刈
 ~年内 天地返し 2番穂鋤込

栽培のポイント

育苗

- ①箱消毒 イチバン(500~1000倍液)
- ②塩水選 うるち比重 1.13(塩:4.0kg/水:20L)
- ③種子消毒
 - ・テクリードCフロアブル200倍+スミチオン乳1,000倍 24時間種子浸漬
 - ・温湯消毒(特別栽培米)
- ④浸種 積算水温で100℃を基準(水温18℃...6日間)
- ⑤播種 うす播き(120g~150g)
- ⑥苗立枯病対策 タチガレエースM液剤(500~1000倍) タチガレン液剤(特別栽培米・1成分)

田植

※ヒノヒカリは高温障害が発生しやすいので極端な早植えは避け、適期に田植を行いましょう。

- ①1株植付本数3~4本。
- ②株間 22~26cm (1坪当り 50~40株)
 - 株間 22cm ⇒ 1坪当り50株
 - 株間 26cm ⇒ 1坪当り40株
- ③除草剤散布後は補植をしない。
- ④補植苗は田より早急に撤去する。(いもち病の発生源)

中干し

1株に茎数が20本程度確保できたら、田面にヒビが入る程度(ヒビの幅が約1cm)に干す。

病害虫	防除時期		防除薬剤		特 裁
	基	幹	防	除	
イヌメイガ、ノミジキ、カマムシ類、ウンカ類、いもち病	播種時	出穂前	スクラム箱粒剤 (3成分)	Zポルドー粉DL	いもち病、カマムシ類、ウンカ類
紋枯病	移植当日	出穂後	スクラム箱粒剤	コラトツ成分粒	いもち病
				スタークル成分粒	いもち病
				ビームエイト成分粒	いもち病
				どちらかを使用	
			50g/箱	3kg~4kg/10a	3kg~4kg/10a
					1000倍・60L~150L/10a

品質向上のポイント

◎「高温登熟障害」に注意
 「高温登熟障害」の症状は、白未熟粒の増加や充実不足等で検査等級及び食味の低下をもたらすため、適正な管理を徹底する。

◎施肥基準の遵守
 気象変動に対応しうる稲づくりのため、基準を参考に施用。

10a当たり(kg)	窒素		リン		カリ	
	元肥	穂肥	元肥	穂肥	元肥	穂肥
ヒノヒカリ	4	3 (計7)	8	6	3	3 (計9)
ひとめぼれ	3	2 (計5)	8	6	3	3 (計9)

※例案施肥・一発肥料は1割削減

◎こまめな水管理
 水のためっぱなしはガス湧きの原因となる。栽培期間中は、間断灌水(3日灌水4日落水)を行う。水が豊富な地域では、登熟期に掛け流しや夜間のかんがいによる地温の低下、収穫時期には落水時期延長などを行い、根の健全化を図る。

◎根張向上による倒伏防止
 中干後の注水時に発根促進剤を同時に流し込む。
 アミハート: 5~10kg/10a 楽々ソイヤール: 6kg/10a

◎適期刈り取り
 早刈り・刈遅れに注意。収穫適期は籾の2割程度青籾が残っている時期。早刈りは未熟粒が増え、刈遅れは胴割れ米、茶米が発生しやすくなる。

◎乾燥調整
 高温乾燥・過乾燥・急速乾燥を避ける。(胴割れ米の発生)
 (適正水分14.5~15%) (調製: 網目1.85)
 蒸れ米に注意し、グレーダーにて屑米・被害粒を完全に選別。

除草剤の使い方

移植後の除草剤散布のポイント

7日間は水を入れない! 間断灌水

2~3日田面が出てても除草効果に影響なし

自然な減

初・中期一発剤	特 裁	ノビエ
移植時・直後~30日	プライオリティ(2成分) (粒・ジャンボ・フロアブル)	3.5葉期まで
移植時・直後~30日	エンペラー (粒・ジャンボ)	3葉期まで
移植時・直後~30日	バッチリLX (粒・ジャンボ・フロアブル)	2.5葉期まで

中後期剤

移植後	除草剤	ノビエ
7日~14日	クリンチャー (粒・ジャンボ)	のみ
15日~収穫60日前	バサグラン (液・粒) ※落水散布	広葉のみ
15日~14日	テッケン (粒・ジャンボ)	ノビエ・広葉
20日~16日	ワイドアタックSC	ノビエ・広葉

●代かき・あぜ塗り・均平化作業は丁寧に
 ●浅植えや浮き苗が生じないように適正な深度で植えつける
 ●移植後直ちに水(水深3~5cm)
 ●散布後3~4日は湛水状態を保ち、7日間は落水・かけ流し禁止
 ●極端に植穴の戻りが悪い水田では、薬剤が直接根にあたるため、田植同時処理を行わない
 ●除草剤散布後に水田内を歩行することは、処理層を壊すため補植は極力しない
 ※使用にあたっては必ずラベルを読んでください。

土づくり

●粗大有機物投与による土壌改善
 ●土壌改良剤による調和のとれた土作り
 ●深耕による有効土層の拡大
 ●3年に1度の土壌診断による適正管理

堆肥や稲わらを還元しない圃場では、地力の低下が懸念されます。地力の低下は、収量だけでなく、検査等級や食味の低下をもたらします。土壌診断を実施し、足りない要素を補いましょう。

有機物の施用方法
 稲わらの鋤き込み(分解促進には「ワラ分解キング」)、「アグリ革命」等の資材を活用)

土壌改良材の施用方法(耕起前)

普通田	ケイカル	ミネラルG	100~200kg
とれ太郎	50~60kg		
けい酸加里プレミアム34	40kg		
土改王	60~90kg		
湿田・砂湿田	珪鉄	150~200kg	

秋落ち現象(根腐れ)防止と倒伏及び病害虫の軽減効果を図るため、必ず施用する。

肥料の施し方

通常分	肥料	一般栽培米		特別栽培米		
		化成肥料	窒素成分量(kg)	化成肥料	窒素成分量(kg)	
通常分	元肥	化成肥料 12-18-14	3.6~4.8	特栽培用BB852 (8-15-12)	3.2~4.0 (1.6~2.0)	
		化成肥料 16-0-16	2.4~3.6	特栽培用追肥O47 (10-4-7)	2.4~2.8 (1.2~1.4)	
	穂肥	化成肥料 16-0-16	2.4~3.2	特栽培用追肥O47 (10-4-7)	2.0~3.0 (1.0~1.5)	
		化成肥料 16-0-16	1.6~2.4	特栽培用追肥O47 (10-4-7)	1.0~2.0 (0.5~1.0)	
一発肥料	苦土入りエムコート477 (14-17-17-Mg ³)	ヒノ(100日)	6.3~7.0	有機入りエムコートまんてん (10-10-10)	普通期(ヒノ)	6.0~7.0 (3.0~3.5)
		ひとめ(90日)	4.2~5.0		早生(ひとめ)	4.0~5.0 (2.0~2.5)
	くみあいBB一発O33 (20-13-13)	ヒノ(100日)	6.0~7.0			
		ひとめ(90日)	4.0~5.0			

※施肥量は土壌、地力、施肥方法、天候等により適宜増減してください。